

令和元年6月20日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13135

研究課題名（和文）グローバル化時代における新しい心理学史の叙述

研究課題名（英文）History of Psychology in Globalization Era

研究代表者

佐藤 達哉（Sato, Tatsuya）

立命館大学・総合心理学部・教授

研究者番号：90215806

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はグローバル化時代における新しい心理学史の叙述と題して、地球規模で展開しつつある心理学という学問的営為の歴史を叙述することが目的である。アジア圏の心理学史、ヨーロッパの心理学史（ドイツ・イギリス以外）を検討することによって、従来の紋切り型的な時代区分を見直した上で、1879年を中心とした時代区分について、手応えを得た。第二次世界大戦後に心理学が普及した国々においては、教育心理学や臨床心理学など応用的な心理学から発展した国も多く、また、UNESCOなどの国際機関が心理学の普及に協力していたことが分かった。戦前から心理学が発展したアジアの国である日本の心理学史の知見も役に立つ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国家資格・公認心理師が制定された現在の日本においては、新しい時代にふさわしい心理学の輪郭を描く必要があり、そのために誠実な心理学史が求められている。これまでの心理学史で半ば神話化されていた近代心理学＝1879年成立説、について、世界の心理学史を丹念に検討することは、極めて重要な意味を持つ。厳密なヒストリオグラフィ（歴史叙述法）の方法に基づいた本研究は、心理学と社会の関係を考えるためにも有用である。

研究成果の概要（英文）：This study aims to describe the history of the academic discipline of psychology, which is developing on a global scale. By examining the history of psychology in Asia and Europe (except Germany and the United Kingdom), this study reconsiders the traditional chronology of the history of psychology. The year 1879 still should be considered important in the formation of psychology as a discipline. This is because the world's first psychological laboratory was established in this year, making it the basis for a variety of further developments. Countries wherein psychology came to be widely known as a discipline after World War II developed sub-disciplines such as educational psychology and clinical psychology from applied psychology. Furthermore, international organizations such as UNESCO cooperated in increasing the awareness about psychology.

研究分野：心理学

キーワード：心理学史 心理学

1. 研究開始当初の背景

現在の心理学は一種の揺籃期・展開期にある。心理学を研究する機関は 20 世紀後半以降（北半球以外の）地球規模に広がり、脳科学の進展や文化的多様性の議論は否応なく心理学的知識や方法に変革を迫っている。その一方で生物としてのヒト、他方で文化的存在の人、について理解する必要があることは、心理学者であれば誰でも実感していることである。

また、現在の心理学史では、50 年以上前にボーリング (Boring, E.G.) によって提案された「心理学先導国 (独仏英米露) 中心、かつ実験心理学中心の歴史」が正史として認識されており、それが書き換えられる兆候はない。その為、地球規模化した心理学、普遍性と個別性を包含する心理学の未来を展望するために新しい歴史の枠組が必要であると考えられる。

方法論には柔軟化の兆しがでていいる。アメリカ心理学会 (APART) が 2012 年に出版した Cooper (編) 『心理学における研究方法』 (全 3 巻、2500 頁) の巻頭に収録されていたのが、ウィリッグ (Willig, C.) による「質的研究のための認識論的基礎の展望」という論文だったことからそれがわかる。

なお、申請時には日本における国家資格である公認心理師のあり方については殆ど議論されていなかったが、公認心理師法は 2015 (平成 27) 年に公布され翌年施行された。これにより、心理学を基盤とする国家資格が日本に誕生したことになり、心理学史の役割もますます重要になったと考えられる。

2. 研究の目的

4 年に 1 度開催される国際心理学会 (ICP) の第 31 回大会が、日本 (横浜) で開催される平成 28 年 (2016) は、昭和 2 年 (1927) に設立された日本心理学会 90 周年という節目の年でもある。

国際学会の直前には日本心理学史の国際発信を要請されることも多かったが、これまで日本の心理学史が世界の心理学史全体へ影響を与えようとする気概は無かった。だが、心理学史の **マスターナラティブ (支配的言説) であったボーリング史観を打ち破る** 新しい作業仮説を提案することが、今求められている。その点から、日本はもとよりアジア・アフリカ諸国 (以下、AA 諸国) の心理学史も踏まえた必要な調査や読み込みを通して、心理学史の方法論に則った **東アジア / 日本発の心理学史叙述を構築・発信** することが本研究の目的である。

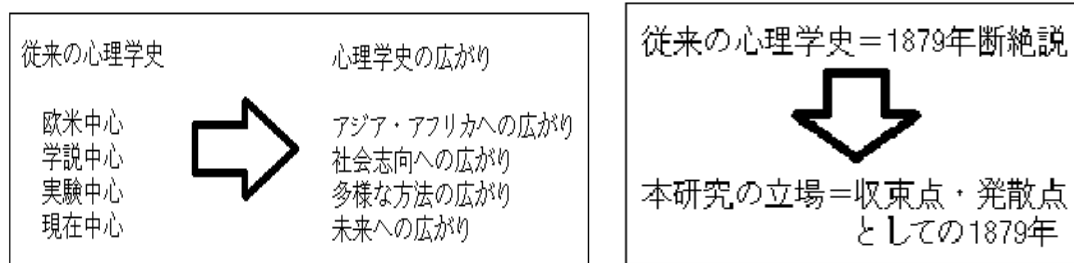


図 従来の心理学史の考え方と本研究における新しい心理学史の見方

3. 研究の方法

以上の目的に沿った心理学史を叙述するため、一次史料、二次史料を読み込む。ヴントが心理学実験室を開設し近代心理学を整備した 1879 年以前の心理学史については、主に哲学史に依拠することになるため、ドイツ哲学史等の知見を広く参照した。

また、海外の心理学史研究者と議論を行い、心理学史の知見を広めることに努めると共に新

しい心理学史の構築の意義を共有した。

4. 研究成果

2015年度に心理学史の重要な人物から心理学史を再考する『心理学の名著30』を刊行した。

2016年度の国際心理学会開催（横浜）にあわせて日本心理学会の英文機関誌『Japanese Psychological Research』に「東アジアからみた日本の心理学史」という特集号を編集・刊行した。

『心理学ワールド』において歴史的エッセイを連載しており、2015年4月からは「心理学の複線径路」というシリーズ、2016年1月からは「日英両語で読む日本心理学史」というシリーズ、2016年10月からは「心理学史の中の女性たち」というシリーズ、2018年10月からは「心理学史諸国探訪」というシリーズを執筆公刊し、従来の心理学史では納まりきれない話題についてグローバル化時代の心理学の視角から解説・情報発信を行った。このうち「心理学史諸国探訪」というシリーズでは、ポーランド、インドという国の心理学について扱い、現在（2019年度以降）もシリーズは継続中である。

心理学史の通史的理解の再編成については以下のような成果があった。

1860年以前の哲学の動向について検討した。ヴォルフの『経験的心理学(1932)』と『理性的心理学(1934)』における経験は感覚・想像力・記憶力が含まれており、理性には論理形式などが含まれている。この二分法は言葉や概念を変えつつも現代の心理学にも受け継がれており、その連続と変化を検討する必要があると分かった。また、1783-93にドイツで刊行されていた学術誌『汝自身を知れ：経験心理の学』が扱う範囲が、ドイツ心理学の範囲を知るために重要である。一方、イギリスでは、既にウィリスによる『脳の解剖学(1644)』において Psycheology という単語が使われていたことがあり、これが後の Psychology につながったと示唆された。

1860年頃の前史につき、精神物理学に加え、進化論や民族心理学を含めて検討した。それにより、この時期の多様な関心が実験心理学として収斂したことを描くことができた。また、イタリアの心理学について人類学者達が切り開いてきたこと、英米独とは異なる動きがあったこと、従って、現在の心理学史からみると曖昧に見えることが分かった。

1879年＝ヴントの心理学実験室は、実験心理学が基盤となることで、学問の独立が果たされたことの意義について、それまでの心理学をめぐる混乱状況を考えた時には画期的であり、実験を基盤とする心理学が近代心理学の礎になったことを紋切り型で捉えてはならない。一種の必須通過点として捉え、そのゆえに次世代の多様な展開が可能になったことが分かった。つまり、1910年代の行動主義・精神分析等を心理学の分裂として捉えてはならず、拡張として捉えるべきなのである。

1960年頃を意味・認知・臨床への関心の広がりとして捉えるのみならず、地球規模で心理学が広がった時代と捉える。第二次世界大戦後に心理学が盛んになった国々（非欧米・一部のアジア諸国）においては、UNESCO等の国際機関が応用領域の心理学（教育・臨床）を推進する力になっていた可能性があり、一層の調査研究が望まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

サトウタツヤ 2018 [心理学史 諸国探訪] 国際心理学会の提唱者オコロビッツ(ポーランド) 心理学ワールド、83号、29-29. (査読無)

サトウタツヤ 2019 [心理学史 諸国探訪] インド、心理学ワールド、84号、29-29. (査読無)

Uwe Wolfradt und Tatsuya Sato 2018 Wilhelm Wundt in Sendai “ - Zur Geschichte der Psychologie in Japan. Psychologische Rundschau, 69, 169-169. (査読有)

Tatsuya Sato, Hazime Mizoguchi, Ayumu Arakawa, Souta Hidaka, Miki Takasuna and Yasuo Nishikawa 2016 History of “History of Psychology” in Japan. Japanese Psychological Research, 58, 110-128. (査読有)

Tatsuya Sato and Yasuhiro Omi 2016 Editorial: History of Psychology in Japan and Within the Context of East Asia. Japanese Psychological Research, 58(SP1), 1-3. (査読有)

〔学会発表〕(計3件)

中妻拓也・川本静香・サトウタツヤ 2017 許容できない事象に対する共感の構造 コフ
ート理論からみた「死にたい」に対する考察 日本質的心理学会第14回大会
中妻拓也・サトウタツヤ 2017 心理学における共感研究の復興 - アメリカにおける心
理学, 文化人類学との関連 - 日本心理学会第81回大会
中妻拓也・サトウタツヤ 2015 シカゴ大学における共感研究の一大動向 日本質的心理
学会第12回大会

〔図書〕(計5件)

木戸彩恵・サトウタツヤ(編) 2019 『文化心理学』ちとせプレス 全290頁
能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志(編集) 2018 質的
心理学辞典 新曜社 全419頁
Tatsuya Sato 2017 Collected papers on Trajectory Equifinality Approach. Chitose Press.
全213頁
Tatsuya Sato, Naohisa Mori and Jaan Valsiner 2016 Making of the Future: Trajectory
Equifinality Approach. Information Age Publishing. 全207頁
サトウタツヤ 2015 心理学の名著30 ちくま書房 全286頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称: なし
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称: なし
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: なし

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: なし

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等に

については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。